

# 野方岩名隈2

—野方岩名隈遺跡第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1367 集

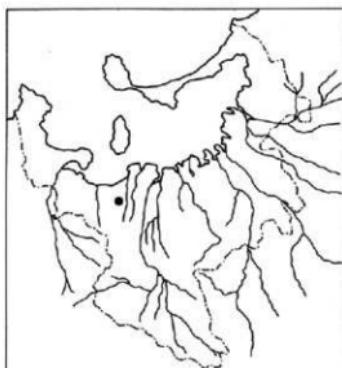
2 0 1 9

福岡市教育委員会

# 野方岩名隈2

—野方岩名隈遺跡第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1367 集



遺跡略号 NKG-2

調査番号 1604

2 0 1 9

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも西区は最近まで開発が及んでおらず遺跡が多く残されている地域のひとつです。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する野方岩名限遺跡の発掘調査報告書は病院増築工事に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代から古墳時代の集落と包含層を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、医療法人 博仁会様をはじめとして多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

平成 31 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

## 例言

□本報告書は西区野方 7 丁目 770 の病院増築工事に伴って平成 28 (2016) 年 5 月 9 日から平成 28 (2016) 年 7 月 29 日にかけて発掘調査を行った野方岩名限遺跡第 2 次調査の報告書である。

□本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。

□構造実測・写真撮影は屋山が、遺物実測と製図等を平川敬二と屋山が担当した。

□本書で用いた方位は磁北である。

□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1604	遺跡番号	1523	分布地図番号	104
調査地地番	福岡市西区野方 7 丁目 770				
開発面積	21098.33 m <sup>2</sup>	調査面積	1037 m <sup>2</sup>	調査原因	病院増築
調査期間	20160509 ~ 20160729		担当者	屋山 洋	

## 目次

I.はじめに.....	1
II.調査の記録.....	4
1.調査の経過.....	4
2.調査の概要.....	4
3.出土遺物.....	4
1)包含層出土遺物.....	7
2)柱穴出土遺物.....	20
4.小結.....	20

## 挿図

第1図 遺跡分布地図 .....	2
第2図 調査地点位置図1 .....	2
第3図 調査地点位置図2 .....	3
第4図 調査範囲図 .....	3
第5図 調査区全体図 .....	5
第6図 I区土層模式図 .....	7
第7図 I区1層出土遺物実測図1 .....	8
第8図 I区1層出土遺物実測図2 .....	9
第9図 I区2層出土遺物実測図 .....	10
第10図 I区3層出土遺物実測図1 .....	11
第11図 I区3層出土遺物実測図2 .....	12
第12図 I区3層出土遺物実測図3 .....	13
第13図 II区1層出土遺物実測図1 .....	14
第14図 II区1層出土遺物実測図2 .....	16
第15図 II区1層出土遺物実測図3 .....	17
第16図 その他の出土遺物 .....	18

## 表

表1 遺構一覧表 .....	21
表2 遺構一覧表 .....	22

## 図版

図版1 1. I区全景 2. I区土層 .....	23
図版2 1. I区遺物出土状況 2. I区3層遺物出土状況 .....	24
図版3 1. I区遺物出土状況 2. I区遺物出土状況 .....	25
図版4 1. I区土層 2. I区土層 .....	26
図版5 1. I・II区境界部土層 II. II区遺構出土状況 .....	27
図版6 1. III区遠景 2. III区西縁部遺構出土状況 .....	28
図版7 1. III区遺構出土状況 2. 遺構半裁状況 .....	29
図版8 1. III区北壁土層 2. 円墳現状 .....	30

## Iはじめに

### 1. 調査に至る経過

平成 26 年(2014 年)10 月 23 日付けで医療法人博仁会から福岡市教育委員会に対して西区野方 7 丁目地内の病院増築工事に伴う埋蔵文化財事前調査の照会(26-2-647)が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野方岩名限遺跡の範囲内に位置しており、平成 8(1996)年にも同病院敷地内の病棟増築に伴って発掘調査(野方岩名限遺跡第 1 次調査 『野方岩名限 1』1998 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 573 集)が行われている。今回も平成 27 年 1 月 28 日と 5 月 14 日に遺構の確認調査を行ったところ、谷の堆積層に挟まれる形で遺物包含層と遺構を確認したため、建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることが必要であると判断した。発掘調査は平成 28(2016)年 5 月 9 日から 7 月 29 日の期間で行った。

調査期間中は休憩所や水道の設置など原因者及び関係者各位の多大なご協力を頂いた。記して感謝したい。

### 2. 調査の組織

調査委託 医療法人博仁会

調査主体 福岡市教育委員会(発掘調査 平成 28 年度 : 整理報告 平成 30 年度)

調査統括	文化財活用部(調査時 文化財部)埋蔵文化財課長	平成 28 年度	常松幹雄
	同課調査第 1 係長	平成 28・30 年度	吉武 学
庶務	埋蔵文化課管理係	平成 28 年度	松原加奈枝
	文化財活用課管理調整係	平成 30 年度	松尾智仁
調査担当	埋蔵文化財課		屋山 洋

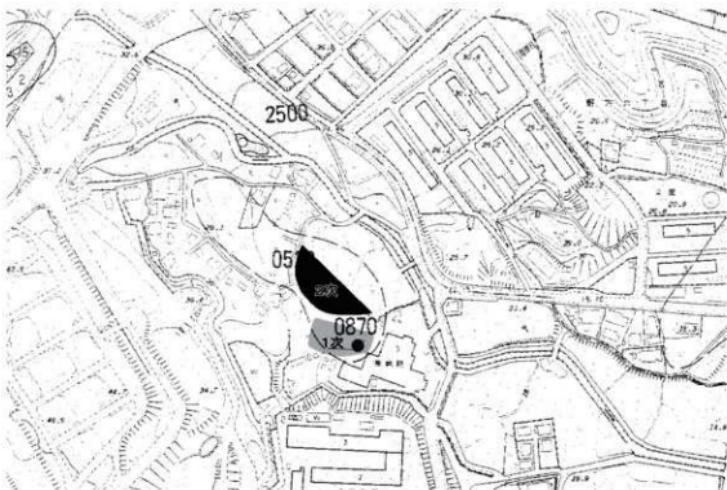
### 3. 位置と環境

早良平野と糸島平野を区切る飯盛山・叶ヶ岳の山脈からは早良平野に向かっていくつの丘陵が伸びているが、野方岩名限遺跡はこの東側に向かって延びる狭い舌状の丘陵上とその丘陵北側の谷部に位置する。周囲の尾根上には広石古墳群など古墳が多く存在したが、開発が進んだ結果その多くが発掘調査後消滅した。今回の調査地点の南西側隣接地でも円墳が 1 基存在することが知られていたが、平成 8(1996)年の病院増築時の確認調査では尾根上の古墳の周囲に集落が存在することが判明し、野方岩名限遺跡の第 1 次調査が行われた。1 次調査で確認された遺構は野方岩名限古墳の周溝の他、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴式住居 7 軒である。今回の 2 次調査は 1 次調査とは異なり、尾根から北側に下った谷の縁部に位置する。谷は幅 100 m 前後を測り、トレンチによる確認調査の結果では現地表下から 2 m 前後は 5 ~ 20 cm 程の礫を主にする砂礫層の堆積である。南側の丘陵端部に沿う幅 5 ~ 13 m の範囲には厚さ 5 ~ 10 cm 前後の黄灰色シルト層や黒褐色粘質土層、粗砂層などが水平堆積層しており、その黄灰色シルト層などで弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物が出土した。

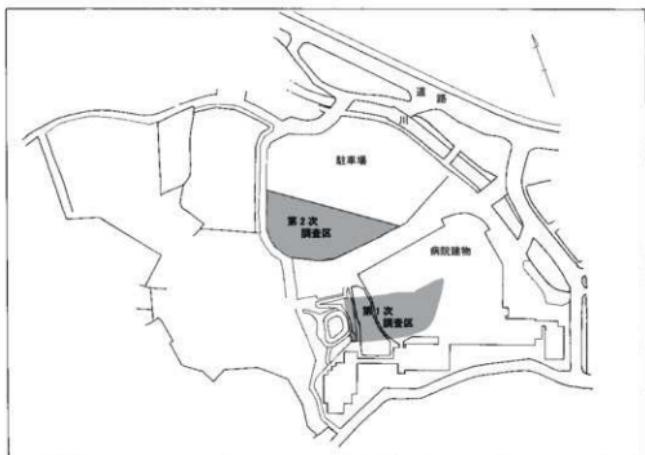
1. 野方岩名隈遺跡
2. 西新町遺跡
3. 藤崎遺跡
4. 有田遺跡
5. 原遺跡
6. 飯倉遺跡
7. 野芥遺跡
8. 免遺跡
9. 次郎丸高石遺跡
10. 田村遺跡
11. 姪浜遺跡
12. 下山門遺跡
13. 斜ヶ浦瓦窯址
14. 拾六町平田遺跡
15. 拾六町亀田遺跡
16. 戸切遺跡
17. 羽根戸原C遺跡
18. 吉武遺跡群



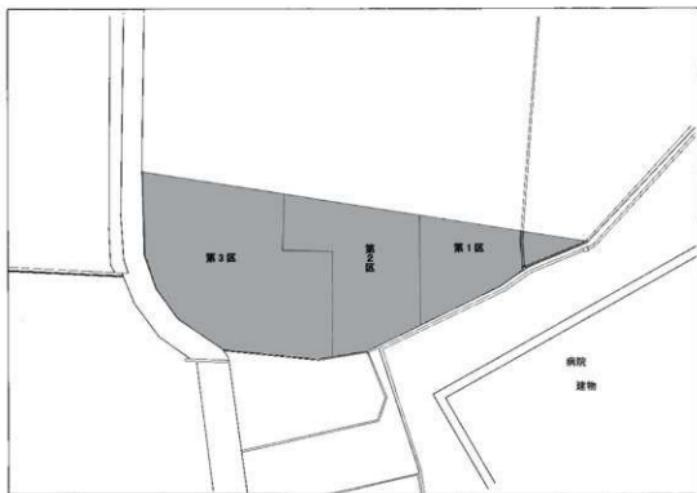
第1図 遺跡分布地図



第2図 調査地点位置図1



第3図 調査地点位置図2



第4図 調査範囲図

## II. 調査の記録

### 1. 調査の経過

申請された開発面積は 21098 m<sup>2</sup>、発掘調査はそのうち確認調査により遺構と包含層が確認された申請地の南半部 1037 m<sup>2</sup>を対象とした。調査時には壁の崩落防止のため境界から 60 cmほど空けて掘り下げを行った。発掘調査は廃土置き場や工事車両の通路確保などの関係から 3 区に分けて行い、東端を I 区、西端を III 区とし、5 月 9 日から I 区の表土剥ぎを開始、10 日に機材搬入を行い、11 日から調査を開始した。5 月 18 日からは II 区も遺構検出を始め、5 月 24 日に I・II 区の全景写真を撮影して調査を終え、工事車両の通路の付け替えを行ってから 6 月 1・2 日で III 区の表土剥ぎを行い、6 月 3 日から 7 月 5 日まで II 区の調査を行った。その後多量に出土した遺物の洗浄を 7 月 25 日までは現場で、7 月 26 日から 7 月 29 日までは整理事務所で行って調査を終了した。

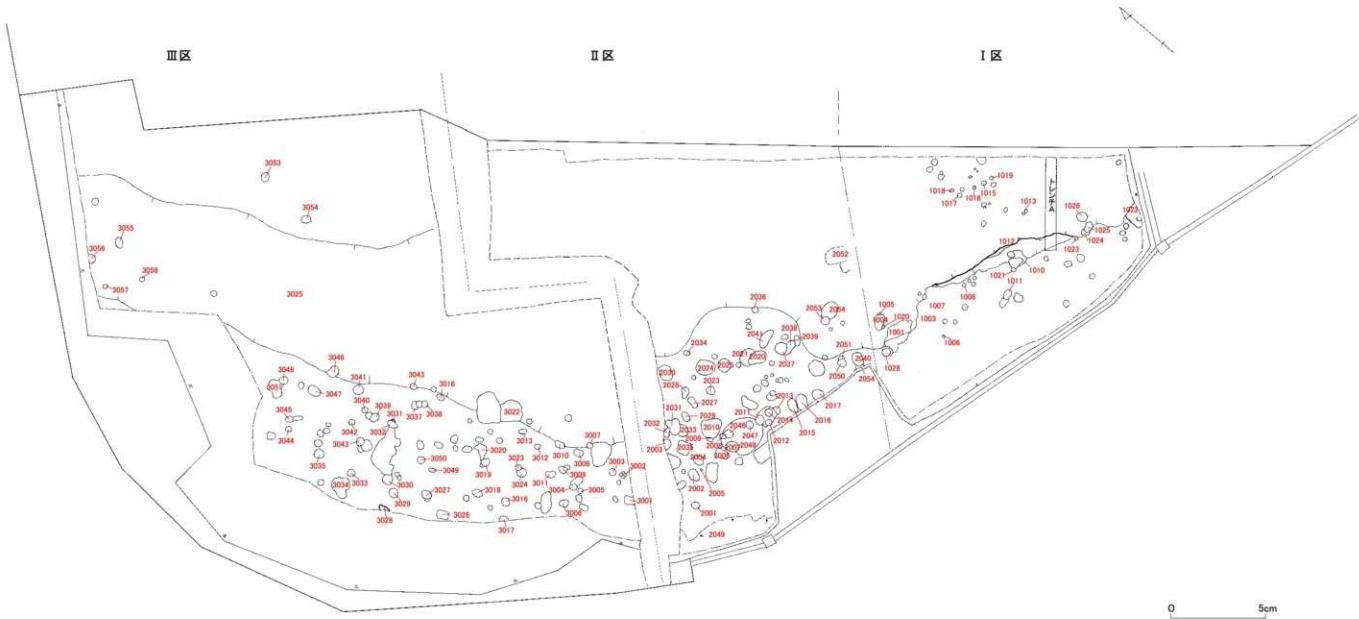
### 2. 調査の概要

各区とも東側に開く谷の南縁に位置し、調査区の南端が丘陵裾に接する。調査前は駐車場として使用されており、I・II 区の路面標高は南側の病院建物周辺とほぼ同じ、III 区はコンクリートで仕切られ 1.4 mほど高かった。調査の結果、標高は III 区北端で I 区より 80 cmほど高く、東側の I 区に向けて緩やかに傾斜していることが判明した。谷中の堆積は礫層を主としているが、今回調査を行った南縁部の地表面は厚さ 5 ~ 20 cm 前後の灰黄褐色シルトや黒褐色土などが水平に堆積しており、調査区北側ではその水平堆積層を谷が削ったのち、ふたたび埋没している様子が伺えるが、その埋土中で遺物包含層を確認した(第 6 図)。

### 3. 出土遺物

**I 区** アスファルト直下(標高 21.9 m)で調査区南縁に沿う幅 5 m の灰黄褐色シルト層に達し、その上面で柱穴群を確認した。灰黄褐色シルト層は厚さ 10 cm 程度その下には黒色土層、同じく灰黄褐色シルト層、粗砂層が水平に堆積している(図版 4-1)。北側は再度谷により灰黄褐色シルト層が削られ、その後、粗砂または砂礫が堆積している。この北側ではアスファルトから約 40 cm 下で淡褐色礫混じり粗砂層が広がり、確認調査ではその上面で柱穴らしき掘り込みが数基確認されていた。淡褐色砂礫層の上には、上から 1. 黒褐色土 2. 黄褐色粗砂混じりシルト、3. 黑褐色土が堆積しており、このうち 1 の黒褐色土層の下と 3 の黒褐色土層が土器片を多く包含することが判明していたため、発掘調査ではアスファルト下の砂利を重機で除去し、て 1 の黒褐色土層上面で遺構検出をおこない、その後それぞれ人力で掘り下げ、その後淡褐色礫混じり粗砂層上面で遺構検出を行うこととした。調査時には 2 の黄褐色粗砂混じりシルト層と 3 の黒褐色土層は掘り分けるつもりであったが、2 と 3 の境界は凹凸が多く、2 の黄褐色粗砂混じりシルト層を掘り下げるとときに黒色シルト層も一部下げてしまったため、包含層の遺物としては 1. 上層(黒褐色土下層)、2. 中層(黄褐色粗砂混じりシルト層と黒色土層上層) 3. 下層(黒色シルト土層)の 3 層に分けて報告する。

**II 区** I 区の西側に位置する。アスファルトと砂利を除去後、I 区と同様に人力で掘り下げを行った。I 区とは異なり 1 の黒色土層の下は 2. 淡褐色砂層、3. 灰褐色砂質土層となっており、2・3 層からは遺物はほとんど出土しなかった。3 層の下には I 区から淡褐色砂礫層が続いており、その上面で柱穴らしき掘り込みを数基確認した。



第5図 調査区全体図 (1/200)



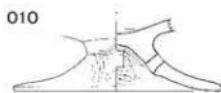
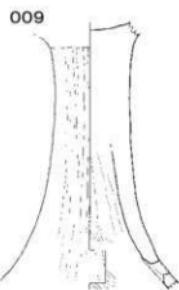
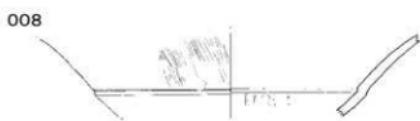
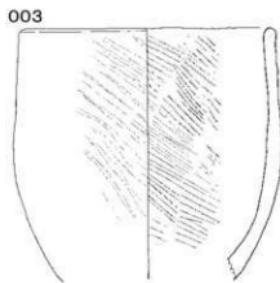
※★1～3が報告する遺物包含層の1～3  
第6図 I区土層模式図

III区 II区の西側に位置し、調査前は駐車場として使用されており標高はI・II区より 1.4 cm程高かった。土層は図版 8-1 に見られるように I・II区から続く淡褐色砂礫層の上に数枚の耕作土が観察された。耕作土の間には遺構が見られず、また遺物包含層も確認できなかつたため重機で淡褐色砂礫層まで掘り下げて遺構検出を行つた。遺構は I・II区同様に調査区南端から 6 mの範囲で柱穴と思われる掘り込みを確認したが、それから北側では遺構は確認できなかつた。遺構の埋土はすべて灰色を呈しており、そのうちの数基から近現代の茶碗や壺が出土した。

## 1) 包含層出土遺物

### 1. I区上層(黒色土下層)

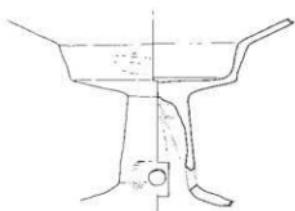
001・002 は須恵器坏蓋である。001 は端部を欠き口径は不明である。色調は内外面とも灰色で胎土は白色砂と黒色粒を少量含む。調整は外面頂部が回転ヘラケズリで、その他は回転横ナデを施す。002 は復元口径 11.8 cm を測る。色調は両面とも灰色で胎土は白色砂と黒色粒を少量含む。外面は口縁端から 1 cmまでは回転ヘラケズリで、その他は回転横ナデである。003 は土師質甕である。復元口径 15.8 cm、残存高 15.2 cm を測る。色調は淡褐色で胎土は白色砂と雲母を少量含む。調整は外面に斜め方向のタタキ、内面にハケを施す。004 は二重口縁壺である。口縁部は「く」の字状を呈す。復元口径 24 cm を測る。口縁外面に 2 列の波状文を施す。色調は内外面とも明褐色で胎土は 3 mm以下の白色砂を少量含む。調整は外面が上半がナデ、下半はハケを施す。005 は手つくねの椀である。底部を欠く。口径 8.5 cm、推定器高 3.7 cm を測る。色調は外面が暗灰色で内面が灰褐色を呈す。胎土は 6 mm以下の白色砂を含む。調整は全体に縱方向の指ナデを施す。006 は壺底部である。底径 4.8 cm を測る。色調は外面が灰褐色で内面はにぶい黄橙色を呈す。胎土は白色砂を多く含む。調整は外面が縦ハケ、内面は横ハケを施す。007 は甕底部である。底径 7.8 cm、残存高 6 cm を測る。調整は摩滅のため不明瞭だが外面胴部はタタキ、底部はナデ、内面は指オサエカ。008 は高壺の坏部で口縁端を欠く。坏部と口縁の間に段がつく。色調は外面がにぶい黄橙色で内面は灰白色を呈す。胎土は白色砂と雲母片を少量含む。調整は外面がハケで内面はミガキカ。009・010 は高壺脚部である。009 は脚部端を欠き、端部近くに径 1 cm の円形透かしを施す。残存高 16.4 cm を測る。色調は外面は淡褐色で内面はにぶい黄橙色



0 10cm

第7図 I区1層出土遺物実測図1 (1/3)

011



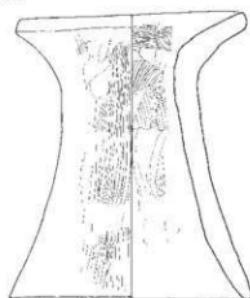
012



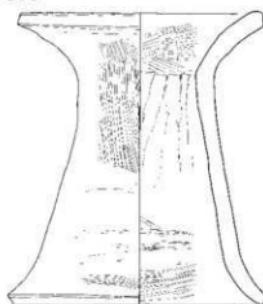
013



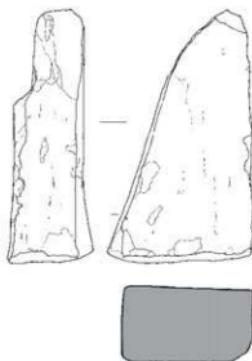
014



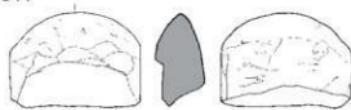
015



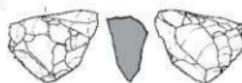
016



017



018



019



0 10cm

第8図 I区1層出土遺物実測図2 (1/3)

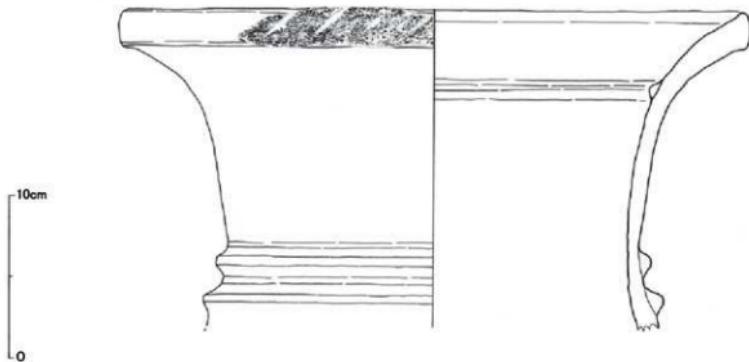
020



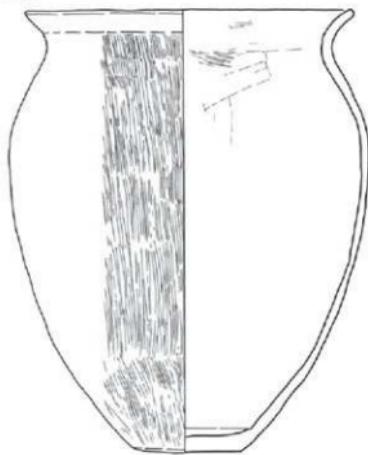
021



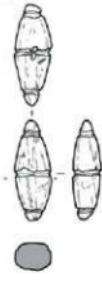
022



023



024

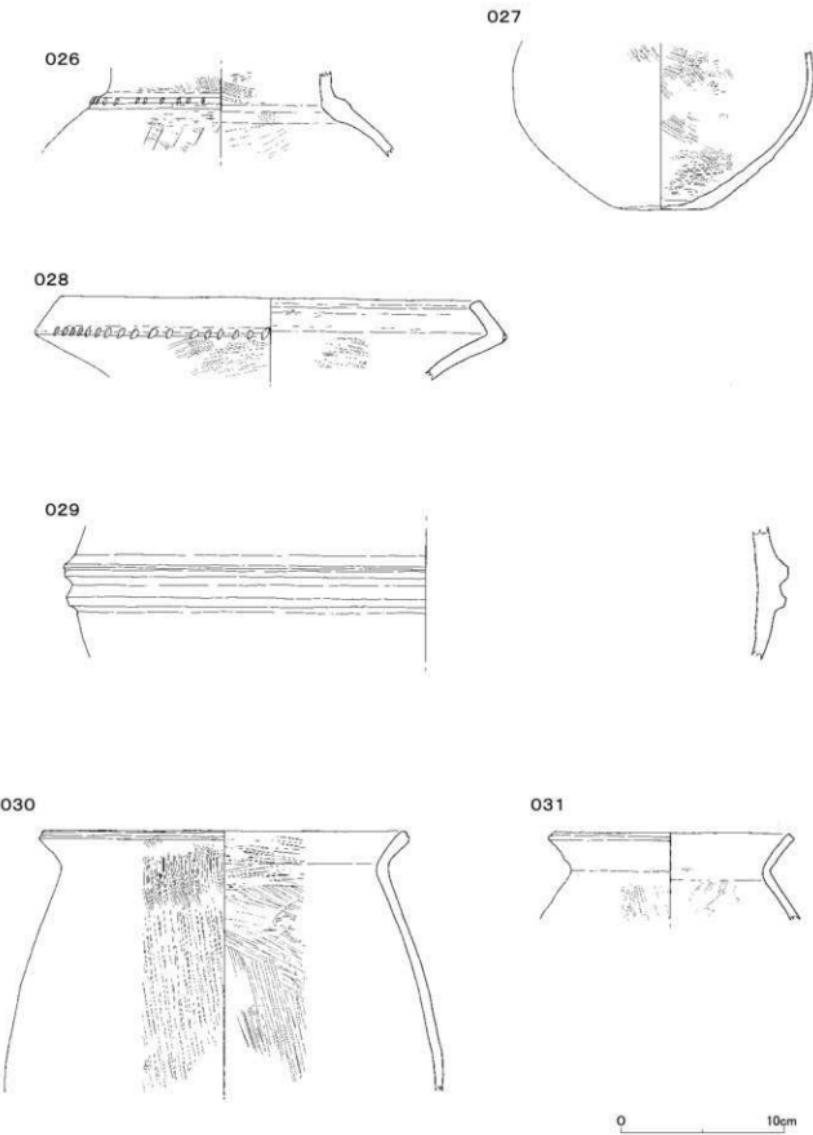


025



0 5cm

第9図 I区2層出土遺物実測図 (1/3、024・025は1/2)



第10図 I区3層出土遺物実測図1 (1/3)

032



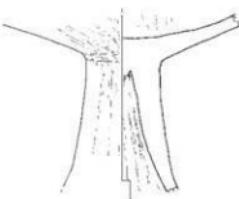
033



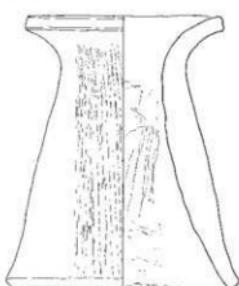
034



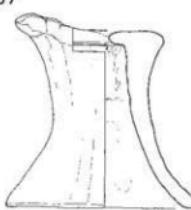
035



036



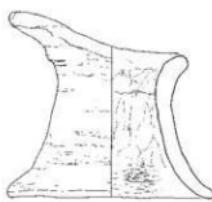
037



038

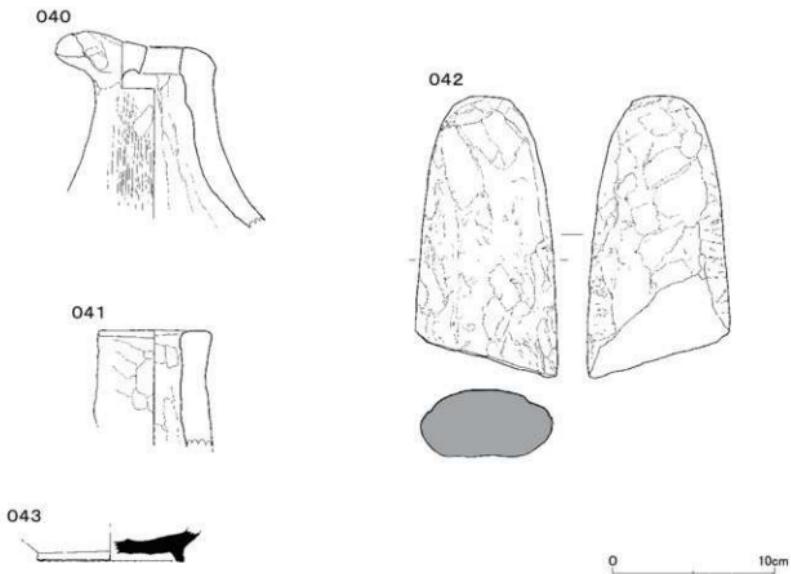


039



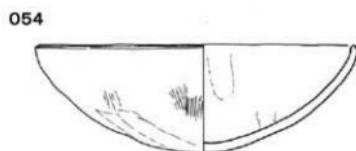
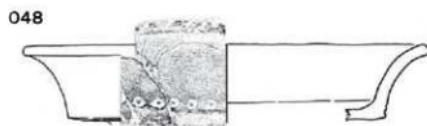
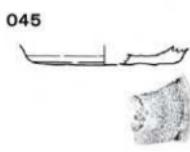
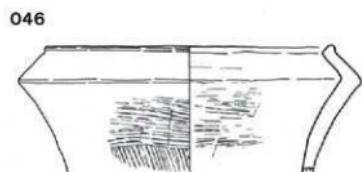
0 10cm

第11図 I区3層出土遺物実測図2 (1/3)



第12図 I区3層出土遺物実測図3 (1/3)

を呈す。胎土は白色砂と雲母を含む。調整はヘラナデを施す。010の脚部は八の字に広がり復元底径12.8cm、残存高4.5cmを測る。脚部端から3.8cmのところに径6mmの円形透かしを施す。内面は黄灰色を呈す。胎土は白色砂と雲母を少量含む。調整は脚部外面が縦ハケ、坏部はヘラナデである。011は高坏である。口縁端と脚部端を欠く。皿部から坏部は直角に近く立ち上がり、口縁は大きく開く。口縁の遺存部は径17.6cmを測る。脚部は垂直に近く端部近くで直角に折れる。屈曲部のすぐ上に径1.2cmの円形透かしを施す。色調は内外面とも淡黄橙色で胎土は精良である。012・013は支脚である。012は頂部に径2cmの孔を穿つ。器高11.3cm、底径10.7cmを測る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は白色粗砂を多く含む。調整は頂部がタタキ、上端が指オサエで下半はナデか。013は角部を欠く。頂部に穿孔はなく、わずかに窪む。器高8.8cm。角を除く頂部径7.4cm、底径10.6cmを測る。器壁は2～3.5cmとかなり厚めである。色調は外面が灰白色、内面は灰白色～明褐色を呈し、胎土は白色砂を多く含む。調整は外面側面がタタキで頂部がハケメである。焼成はやや不良である。014・015は器台である。014は器高17.5cm、口径14.1cm、底径14.9cmを測る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には白色砂、雲母片を多量に含む。調整は外面全面に縦ハケ、内面は口縁下が横ナデで脚部には縦ハケを施す。器壁は1.0～1.3cmを測る。015は器高17.8cm、口径15.0cm、底径15.9cmを測る。色調は内外面とも褐灰色を呈し、胎土は白色粗砂を多く含む。調整は口縁部がナデ、外面上半が縦ハケ、下半が横ハケ、内面は口縁下が横ハケ、脚部上半が指ナデ、下半は横ハケを施す。器壁は1cm前後である。016は砂岩製の砥石である。長径15.3cm、最大幅8.9cm、厚さ4.5cmを測る。図の上端を欠く。重さは744.3gを測る。017は玄武岩製磨製石斧の刃部である。残存長5.8cm、幅8.0cm、厚さ約3cmを測る。表面はかなり風化している。018・019は安山岩製スクレイバーである。018は図の外側端部が欠損している。縦4.4cm、横5.5cm、重さ40.55gを測る。019は縦2.7cm、横3.9cm、厚さ0.8cm、



0 10cm

第13図 II区1層出土遺物実測図1 (1/3)

重さ 7.43 g を測る。

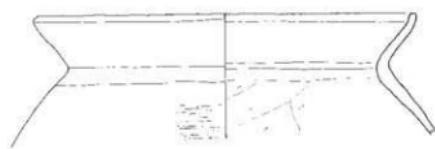
## 2. I 区中層(黄褐色粗砂混じりシルト層+黒色土上層出土遺物)

020 は壺口縁である。口径 14.0 cm を測る。内外面とも灰白色を呈し、胎土は白色砂を少量含む。調整は外面が縦ハケ、内面は横ハケを施す。021 は鉢口縁である。復元口径 25.6 cm を測る。色調は外面が煤のため黒色、内面は淡褐色を呈す。胎土は多量の白色砂と少量の雲母を含む。調整は外面がタタキ後ハケ、内面は横ハケを施す。022 は大型壺の頸部から口縁である。復元口径 38.4 cm を測る。内外面とも淡黄橙色を呈し、胎土は多量の白色砂を含む。口縁端に刻目を施し、肩部に断面三角形の突帯を 2 条巡らす。023 は甕である。口径 20.8 cm、器高 27.2 cm を測る。外面は煤のため黒褐色、内面は暗褐色である。調整は内面の口縁がハケ後ヘラナデで胴部がナデ、外面は全面に縦ハケを施す。底部は若干膨脹らみ気味である。024・025 は滑石製錘で紡錘形を呈す。024 は完形で全長 4.1 cm、最大幅 1.5 cm を測る。断面は梢円形を呈す。中央と両端に長軸に直行して沈線を巡らす。片面のみ長軸方向の凹線があるが、不明瞭である。凹線を掘る途中の未製品であろうか。重さは 6.87 g を測る。025 は片方の端部を欠損する。残存長 4.7 cm、最大幅 1.8 cm を測る。中央に直行する凹線と長軸方向の凹線を刻む。断面は梢円形を呈す。

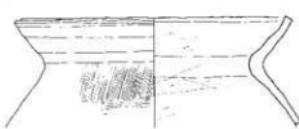
## 3. I 区下層(黒色土)

026 は壺肩部である。肩部に断面三角形の突帯を一条巡らし、刻目を施す。突帯部復元径 16.0 cm を測る。色調は内外面とも淡褐色を呈し、胎土は多量の白色砂と少量の雲母を含む。調整は外面頸部が縦ハケ、突帯部は横ナデ、肩部は上半が横ハケで下半は縦方向の線刻を施す。内面は頸部が横ハケ、肩部はヘラナデを施す。027 は壺の胴部下半である。全体が球状を呈し、胴部最大径は 18.4 cm、底径は 4.8 cm を測る。色調は外面が淡褐色、内面がぶい黄橙色を呈す。胎土は白色砂を含む。調整は不明瞭だが外面はハケ、内面は斜めへ横方向のナデを施す。028 は二重口縁壺の口縁部である。復元口径は 25.8 cm を測る。口縁は鋭角に折れて刻目を施す。色調は淡褐色で胎土は白色砂を多く含む。調整は内外面ともハケを施す。029 は大型壺もしくは甕胴部である。突帯部復元径は 44.4 cm で、幅 3.2 cm の M 字突帯が付く。色調は内外面とも明褐色で胎土は白色砂を多く含む。調整は摩滅のため不明である。030・031 は甕の上半である。030 は口縁が「く」の字を呈す。復元口径 22.8 cm を測る。色調は外面が煤が付着、内面は黄橙色で胎土は白色砂を多く含む。調整は縦ハケで、内面は一部に横ハケを施す。031 は口縁が「く」の字を呈し、復元口径 15.0 cm を測る。色調は内外面とも煤が付着して黒褐色を呈す。胎土は白色砂を多く含む。調整は口縁が横ナデ、外面肩部は縦ハケ、内面はヘラナデである。032 は甕底部である。底径は 8.1 cm を測り、底面は若干膨らむ。色調は内外面とも褐灰色で胎土は白色砂を多く含む。調整は全体に縦ハケを施す。033 は瓶底部である。底径 4.8 cm と狭く、丸みをもつ。底面中央に径 1.2 cm の穿孔を施す。色調は外面が明褐灰色、内面が明赤灰色で胎土は白色砂を多く含む。調整は不明である。034 は椀である。復元口径 13.2 cm、器壁はやや厚めで 7 mm を測る。色調は端灰褐色で胎土は白色砂を多く含む。調整は不明である。035 は高杯の脚部と杯部下半である。脚部上端の径は 4.5 cm を測り、脚部残存端部に径 1 cm の円形透かしを施す。色調は内外面とも褐灰色で、胎土は白色砂を多く含む。調整はヘラナデか。036 は器台である。復元口径 12.2 cm、器高 16.5 cm を測る。色調は淡褐色で胎土は白色砂を多量に含む。調整は外面に縦ハケを施す。037～040 は支脚である。037 の頂部は平坦で径 2 cm の孔がある。器高 118 cm を測る。色調は外面赤灰色、内面褐灰色を呈し白色砂を多く含む。調整は不明。038 は頂部に径 1.3 cm の孔を穿つ。器高 112 cm、復元底径 10.8 cm を測る。

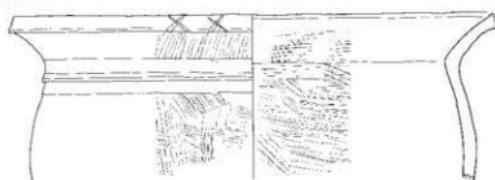
056



057



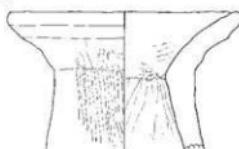
058



059



060



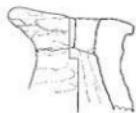
061



062



064



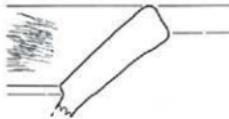
065



0 5cm

第14図 II区1層出土遺物実測図2 (1/3)

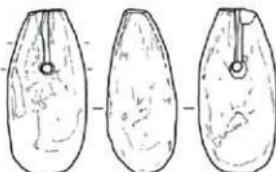
066



067



068



069



0 10cm

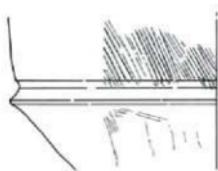
070



第15図 II区1層出土遺物実測図3 (1/3)

色調は淡灰褐色で胎土は白色砂を多量に含む。調整は外面胴部はタタキ、内面は強い指ナデを施す。039は頂部に粘土を貼らないタイプである。器高 11.3 cm、底径 12.7 cm を測る。色調赤褐色～明褐色で胎土は白色砂を多量に含む。調整は外面がタタキ後ナデ、内面は上半がナデ、下端は横ハケを施す。040は下端を欠く。頂部は径 2.2 cm の孔を穿つ。色調は淡橙色で胎土は白色砂を含む。調整は不明瞭だが胴部外面が紙ハケを施す。041は小型の器台で下半を欠く。口径 7.0 cm を測る。色調は外面が明褐色、内面褐灰色で胎土は白色砂を多く含む。調整は不明。042 は玄武岩製打製石斧である。刃部を欠く。残存長 17.2 cm、最大幅 8.6 cm を測る。043 は須恵器高台付壺である。高台部径は 8.9 cm を測る。色調は外面が暗青灰色、内面が青灰色を呈す。胎土は白色砂をわずかに含み、焼成は良好である。調整は回転ナデで底部は回転ヘラ切りである。

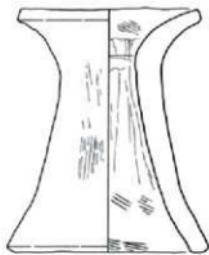
071



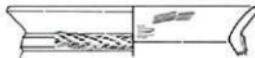
072



074



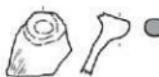
073



075



076



0 10cm

第16図 その他の出土遺物 (1/3)

#### 4. II区上層(黒色土下層)

044～070はII区上層の黒色土層から出土した。044は須恵器大甕片である。色調は内外面とも青灰色を呈す。外面は席状のタキ後に横方向のハケ、内面は青海波紋状のタキである。胎土は精良で白色微粒砂をわずかに含む。045は土師器壺の底部である。外底部は回転ヘラ切りで復元底径は8.8cmを測る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良である。046は二重口縁壺である。復元口径17.6cm、残存高7.7cmを測る。色調は内外面とも明褐灰色を呈し、胎土は白色砂と雲母片を多く含む。調整は内外口縁部は横ナデ、外面頸部は上側が横ハケで下が縱ハケ、内面は横ハケを施す。器壁は厚さ0.7～1.0cmである。047は壺肩部である。2条の突帯を巡らし、刻目を施す。色調は内外面とも灰白色で、胎土は白色砂と雲母片を少量含む。調整は全体的にナデを施す。048・049は二重口縁壺である。048は復元口径24.8cmを測る。口縁端の刻目と口縁下に竹管文を連続して施す。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には白色砂を含む。調整は不明瞭である。049は復元口径16cmを測る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には白色砂を少量含む。調整は全体に横ナデを施す。050は土師質壺肩部である。上端に凹線を施す。色調は外面が黄白色で内面が灰白色、胎土には白色砂を多く含む。調整は外面が横ナデ、内面は横方向のヘラケズリを施す。051は素焼きの壺胴部下半である。2本の線刻があり、記号か絵と思われる。色調は外面が黄灰色、内面が黄橙色で胎土に白色砂を少量含む。調整は外面がヘラナデ、内面がハケ後ヘラナデである。弥生時代と考えられる。052は素焼きの土器小片

で外面は縦ハケ後に線刻を施す。色調は外面が黒褐色から黄灰色で内面は黄橙色を呈す。胎土には白色砂を少量含む。053 は壺底部である。底径約 4 cm を測る。色調は内外面とも灰白色で、胎土には白色砂と雲母片を少量含む。調整は外面が斜め方向のタタキ、外底部がナデ、内面はハケを施す。054 は土師楕である。復元口径 19.8 cm、器高 8.6 cm を測る。色調は内外面とも明褐灰色を呈し、胎土には白色砂と雲母片を少量含む。調整は外面上半が縦ハケ、下半がヘラケズリ、内面は不明である。器壁厚は 5 mm 前後である。055 は手づくねの楕である。復元口径 8.6 cm、残存高 3 cm を測る。色調は外面が黄灰色から明褐灰色で、内面は褐灰色から明褐色を呈す。調整は外底部がヘラナデで、その他全体には指オサエを施す。056・057 は土師甕である。056 は復元口径 23.4 cm を測る。色調は外面が褐灰色からぶい黄橙色で内面は褐灰色から灰白色を呈す。胎土には白色砂を多く含む、雲母片も少量含んでいる。調整は口縁部内外面が横ナデ、肩部外面が横ハケ、内面はヘラケズリを施す。057 は復元口径 17 cm を測る。色調は外面が褐灰色で、内面は灰白色を呈し、胎土は白色砂と雲母片を少量含む。調整は口縁部内外面が横ナデ、外面胴部が縦ハケで下端に横ハケがみられる。内面は横方向のヘラケズリを施す。058 は大型甕である。口縁部は八の字に開き復元口径 29.8 cm を測る。口縁端に X 字の刻目を施し、頸部に突帯を 1 条巡らす。色調は外面が灰白色～ぶい黄橙色で、内面が灰白色を呈す。胎土は白色砂を多く含む。調整は外面が横ハケ後縦ハケ、内面は斜めハケ後に横ハケを施す。甕棺として使用したものか。059 は甕である。口径 12.2 cm、器高は約 12.5 cm を測る。色調は外面が灰白色、内面が橙色から灰白色を呈し、胎土は白色粗砂を多量に含む。調整は外面が口縁部が縦ハケ、肩部が横ハケ、胴部は縦ハケを施す。内面が口縁部に横ハケ、胴部は斜め方向のハケである。060 は器台である。復元口径 14.4 cm を測る。色調は外面が褐灰色、内面が灰白色を呈し、胎土は白色粗砂を多く含む。調整は外面が縦ハケ、内面が受け部が横ハケ後ナデを施す。061～064 は支脚である。061 は頂部径 8.9 cm、器高 11.2 cm、底径 11.9 cm を測る。頂部に径 1.5 cm の孔を穿つ。色調は外面が褐灰色～ぶい赤橙色で内面は褐灰色を呈し、胎土には白色粗砂を多く含み、大きなものは径 6 mm 程のものも含んでいる。調整は頂部がタタキ、脚部外面は横方向のタタキで、内面は縦方向のナデを施す。062 は頭部のみで頭部長 9.0 cm を測る。頂部に径 1.6 cm の孔を穿つ。色調は内外面とも褐灰色を呈し、胎土は白色砂を多く含む。063 は脚部である。底径 10.8 cm を測る。他の支脚とは異なり、内部は底面から 2.5 cm 程上げ底だが、上部は空洞ではない。色調は外面が淡黄橙色で内面は明褐灰色を呈す。胎土には径 3 mm ほどの白色砂を多く含む。調整は不明である。064 は上半部のみである。頭部長 7.7 cm を測り。頂部に径 1.5 cm の孔を穿つ。色調は外面が灰白色、内面は褐灰色～灰白色を呈し、胎土は白色砂を多く含む他、雲母片も含む。外面に横方向の段がみられる。065 は棒状の土製品で用途不明である。残存長 5.4 cm を測り、緩やかなカーブを描く。径 1.9 cm を測る。色調は灰白色を呈す。066 は甕棺の口縁部である。色調は外面がぶい橙色、内面が灰白色を呈し、胎土には多くの白色砂と少量の雲母片を含む。調整は内面が横ハケ、外面はナデと思われる。067 は円筒埴輪の可能性がある。内面に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。色調は内外面とも灰白色で、胎土には 5 mm 以下の白色砂を多量に含む他、少量の雲母片を含む。調整は内外面とも粗いハケを施す。068 は滑石製錘である。頂部をわずかに欠損するもほぼ完形である。全長 10.0 cm、最大幅 4.8 cm、厚さ 4.3 cm を測る。中央から少し上側に径 7 mm の穿孔があり、それから頂部にむけて幅 4 mm 深さ 2～3 mm の溝を彫り込む。重さ 299.61 g を測る。069 は砂岩製砥石である。残存長 12 cm、幅 7.2 cm、厚さ 2 cm を測る。070 は甕棺の頭部である。突帯部の復元径は 49.8 cm を測る。幅 2.5 cm の突帯を 1 条巡らし、V 字の刻目を施す。色調は内外面とも淡黄白色で、胎土には 4 mm 以下の白色砂と少量の雲母片を含む。

## 2) 柱穴出土遺物(第16図071～076)

071は3025から出土した壺である。胴部下半に1条の突帯を巡らし刻目を施す。突帯部の復元径は25.2cmを測る。色調は内外面とも灰白色を呈す。胎土には白色砂を含む。調整は外面が縦ハケ、内面はナデである。072は3025から出土した甕棺突帯部で2条の突帯を巡らす。色調は外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈す。胎土には3mmほどの白色砂を多く含む。073は2016から出土した甕である。口縁は「ハ」の字形に立ち上がり復元口径15.6cmを測る。頸部に突帯を1条巡らし刻目を施す。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には白色砂と雲母片を少量含んでいる。調整は外面が縦ハケ、内面が横ハケである。074は1014から出土した器台である。復元口径11.1cm、器高14.8cm、底径12.5cmを測る。色調は内外面とも淡灰褐色を呈し、胎土は白色砂と少量の雲母片を含む。調整は外面が縦ハケ、内面下半は斜め～横向方向のハケを施す。075はI区の遺構検出時に出土した須恵器壺蓋片である。色調は内外面とも灰色を呈す。外面は回転ヘラケズリでヘラ記号と思われる凹線がある。076はIII区黄色シルト層から出土した。支脚にしては器壁が薄く、甕もしくは鉢の取手部分と思われる。色調は黄白色呈し、胎土には白色砂を少量含む。調整は外面に縦ハケの痕跡が残る。

## 4. 小結

野方岩名隈遺跡は南側丘陵上の平坦面(現在駐車場として使用)での1次調査で確認された弥生時代から古墳時代前期の集落と円墳1基を主体とする。集落に関しては推定される集落域に対して発掘調査が行われた範囲が狭く、全容は不明である。今回調査した2次調査は丘陵北側に広がる谷の南縁部である。トレーニング調査で確認した堆積状況から砂礫の流入と流出を繰り返す不安定な状態であったと推定される。各区とも遺構の分布が調査区の南端から5～10mに限られるのは、現在北側を流れる谷川の流路であったためである。今回の調査では包含層から多くの遺物が出土した。黄色シルト層から黒色土下層まで包含層から出土した遺物は深いパンケースに詰め込んだ状態で41箱を数える。出土した土器片は大小様々であるが、その多くは表面の摩滅が著しく、接合できた土器片は少なかった。上下端部がない土器片が多く、出土遺物の多くを図化・記載できなかったのは残念である。

包含層から出土した遺物は各層とも弥生時代後期から古代の遺物を含むなど各層に時代差は見られなかった。このことや先述した摩滅の激しさ、接合できた土器片の少なさから遺物は南側丘陵上の集落と円墳から流れ込んだ2次堆積であると推定される。今回出土した遺物から丘陵上の集落の時期が1次調査で確認された弥生時代後期から古墳時代前期と古墳時代後期(円墳)だけではなく7～8世紀や11～12世紀の遺構が存在する可能性がでてきた。遺物は出土した弥生時代中期や後期の甕棺や壺、甕などから墓群を伴う一般的な集落と思われる。調査終了後、III区中央部にトレーニングを設定して深さ4m程掘り下げたが、礫・砂礫の堆積が続き、遺構・包含層は確認できなかった。

表 1 遗稿一览

表 2



1. I 区全景



2. I 区土層

图版2



1. I 区遗物出土状况



2. I 区3层遗物出土状况



1. I 区遺物出土状況



2. I 区遺物出土状況

图版 4



1. I 区土层



2. I 区土层



I. I・II区境界部土層



II. II区遺構出土状況

図版6



1. III区遠景（南東から）



2. III区西縁部遺構出土状況（南東から）



1. Ⅲ区遺構出土状況（南から）

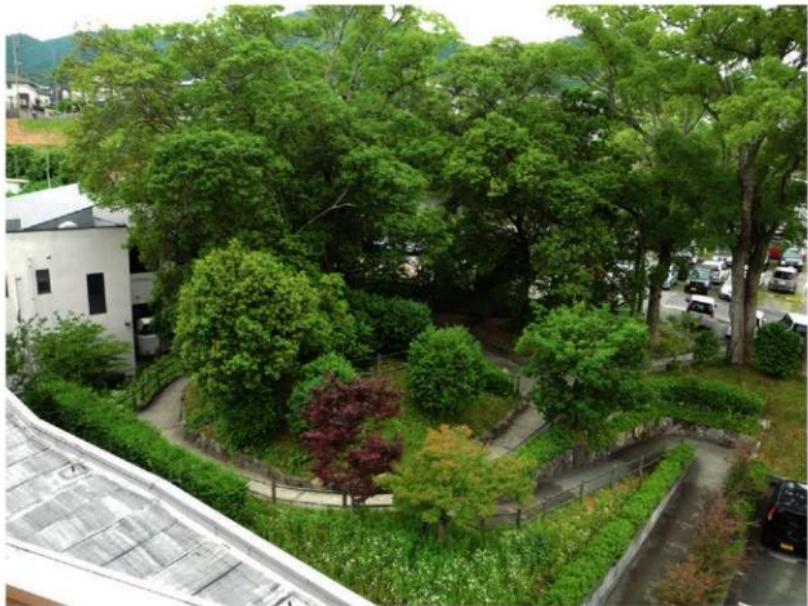


2. 遺構半坑状況

図版 8



1. III区北壁土層



2. 円墳現状

報告書抄録

ふりがな	のかたいわなくま 2										
書名	野方岩名跡 2										
副書名	野方岩名跡遺跡第2次調査報告										
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書										
シリーズ番号	第1367集										
著者名	星山洋										
編集機関	福岡市教育委員会										
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1										
発行年月日	2019年3月25日										
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因				
所収遺跡名	所収遺跡名	市町村遺跡番号									
所在地	福岡市西区 野方7丁目770	40135	1523	33° 33' 30"	130° 18' 9"	20160509 ～ 20160729	1037m <sup>2</sup> 病棟増築				
のむらいわなづきやま 野方岩名跡遺跡											
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項							
集落	弥生時代中期～古代	柱穴・包含層	弥生土器・土師器・須恵器・貿易陶磁								
要 約											
野方岩名跡遺跡は草良平野と今宿平野を区切る飯森山・叶ヶ岳の山麓から東側に延びる尾根と扇状地上に位置する。周囲の尾根上には古墳が多く見られるが、今回の調査地点の南西側隣接地でも円墳の存在が知られていた。1996年の病院建て増し時の確認調査で古墳隣接地の尾根上で集落跡が確認され、野方岩名跡1次調査が行われた。確認された跡は野方岩名跡古墳の東側の他、弥生時代後期から古墳時代初期の多室式横穴墓群である。また、1996年の確認調査と1997年の確認調査で北側に上り下り階段に付随する。調査区全焼失谷中で5～20cm程の土壠を形成する砂礫層が少なくとも2m以上堆積している。調査区中央の谷の堤土中から弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。出土した遺物は1次調査と同時期で尾根上からの流れ込みである。その他には古墳に伴う可能性がある須恵器片と7～8世紀頃の須恵器片、中世～近世の陶磁器がそれぞれ1～2点ほど出土した。											

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1367集

野方岩名跡 2

-野方岩名跡遺跡第2次調査報告  
平成31年(2019年)3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 (有)アドブリ  
福岡市博多区山王2丁目5-27